小袖曽我

観世流改訂謡本

内 五

四番目
略二番

小袖曾我

五月

ツレ 曾我五郎
シテ 曾我十郎
ツレ 母
狂言 春日局
ツレ 團三郎
ツレ 鬼王
（素謡ニナシ）

十郎五郎 次第上（二人）ツヨク
命牡鹿の隱れ里。命牡鹿の隱れ里。富士の裾野を狩らうよ

十郎サシ
これは曾我の十郎。祐成にて候。さても頼朝富士の御狩に御出で候間。われらも罷り出で候。又これなる時致は。母にて候者の勘當にて候程に。申し直し連れて御狩に

罷(マカ)り出でばやと存ずる

十郎五郎(四人)サシ上 時しも頃ハ建久(ケンキウ)四年(シチシ)。五月(サツキ)半(ナカバ)の富士の雪。五月雨(サミダレ)雲(グモ)よみりまぜて。かのこまだらや村(ムラ)山(ヤマ)の。裾野(スソノ)の鹿の星月夜(キ)。鎌倉殿の御(ミ)狩の御遊(ギョユウ)。げに類(タグイ)なき御事かな

十郎上 東(トオ)八箇(ハッカ)国(コク)の兵(ツワモノ)ども。皆御供よ集るなれば。

十郎五郎(四人)中 定めて敵(カタキ)の祐経(スケツネ)も。御供申さぬ

事あらじ。たとひ撃つまでの。事は
夏野の鹿はありとも。狙ひて見ばや
ますらをの。狩人は紛れうち出づる

下歌
人知れぬ大内山の山守も。

上歌
木隠れて。それとは見えじ梓弓。それとは見えじ梓弓矢ごろはあらじ鹿よりも。祐経を射そめて。名をも富士の嶺に

あげぞやと思ひ定めぬる将衣。たとへだ君の御咎。よしそれとても數ならぬ。身はなか〳〵懼なか〳〵身はなか〳〵懼なし・

十郎台「これは暫らく御待ち候へ。某參りて案内を申さうずるまで候」狂言シカぐ

母「あら珍らしや十郎殿。いづくへのついでぞや。母が爲よわざ〳〵よも

十郎「さんば

久しく参らざりし程に向顔のため。又ハ富士の御狩と申し程に

母カヽル上「されバこそ思ひし事よ君が為。御狩に出づるついでぞや

十郎「とても親子の御戯れ。めづらし顔よ羨しやと

五郎「思ひながらも時致ハ。不興の身なれバ物の隙より

地上「高間の山の嶺の雲。よそにのみ見てや

歩みなん。同じ身よ。同じ柞のもりめ
のと。同じ柞のもりめのと。隔なくこそ
育てしよきもひきかへて祐成は。
いろくのおもてなし御祝事のお盃。
たとへだに時致は。後に生れしばかりなり。
まさしく同じ子の身にて。御覧あし
がきの隔あることこそ悲しけれ」
十郎 日本一

の御機嫌よふて候。あれへ御参りあつて。

春日(カスガ)の局(ツボ子)をもつて申されう(ツレ)「五郎」某が

事は御機嫌いかゞ計りがたく候間。

まづ〳〵参り候まじ「十郎」唯某に御任せ

(ツレ)あつて。急いで御参り候へ」「五郎」いかに春日

の局。時致が参りたる由それへ申し候へ」(ツレ)

(カヽル上)よしやもり乳母(メノト)まで。心変(ガワ)りし春日

野の。飛火の野守。出でゝたゞ見よ見えぬぞや。時致が乗りたる由それゝ申ゆへ

母「おゝふしぎや。祐成は唯今来りぬ。九上の禪師は寺にあり。それならで子はなきぞよ。時致といふは誰ぞや。今思ひ出したり。箱根の寺にありし箱王といひし乞せ者ぞ。それならば母が出家

よあれと申しゝちときかざりしほどよ
勘當せしよ。おしてこれまで来れるゝ。
尚重ねての勘當とや。伊豆箱根富士
權現も御覧ぜよ。尚この後も勘當と
五郎上 内誓言よ蔀遣戸を
地上 たてそへ
られて茫然とやる方もあき此身かな。
うたてやせめて今一目。御簾几帳も

おりたりあら。情なの御事や。祐成は。
かくとも知らで時致が。時移りたり
事よきかと。中門を見やりつゝはや
此方へと招けど招かれて山のか
せきなくまりたり。打たれても
親の杖。なつかしければ去りやらぞ
なつかしければ去りやらぞ　さては

御座候ぞ（トモ）

機嫌ハ何と御座候ぞ　五郎「以ての外の御機嫌まで。尚重ねての御勘当と仰せ出されてハ」母、狂言シカタ　十郎「某存ずる子細の候間。この度ハ同心まで申さうずるまでハ　五郎「いやく某ハまゐり候まじ　十郎「唯御免有り候へ」。いかに申候。われらが親の敵の事。世に隠れなく候所に。あま

時致が事をも申さばトモ

りよ便なくば向。時致が事をも申し直し。連れて御狩に出づべき所に。時致が事をも申さばや。祐成も共に勘当とかや。

よくよくこれを案じ見るに　總じて祐成をもまことと思ひ給はぬぞや

地　たとひ時致出家の暇をと申すとも。兄祐成に郎等もなし。志かも身に

思ありおのれらさへに見捨つるかと。却つて御叱り候ひてこそ。慈悲の母とも。申すべけれ。

十郎「それは時致を法師にならぬとて。御勘當。たとひ仰に従ひ。出家仕り候ふとも

地「われらが事は世に隠れなし。あれ見よ河津が子どもとこそ。敵を遁れんその出家。志しく弘

法の為ならずとも。同宿も思ひ卑まじ。
心も染まぬ墨衣の浦島が子の。箱根
寺まで。明暮くやしと思ふならで。
なか〳〵俗なれ劣るべし」時致は。
箱根にありしをりに。法華経一部
読み覚え。常は読誦し母上の。現世
安穏後生善所と祈念する。又は毎

日よ。六萬遍の念佛又河津殿よ
廻向する。かほどまで他念なき身を此
三年不興被る恩顔を拝せねば御
戀しさも一つ又は狩場へのかどいで。
御暇ごひしき一方ならぬ望なり。
大事に治まる御代ながらも狩場や
漁捕よ。不慮の争ひあるものを

十郎 五郎 上 其上われらハ。狩場において御悪し 地 昔を思ひ伊豆の奥の。赤澤山のかりくらにて。父も失せさせ給ひしぞや今とても。狩場とあらばなどしも。御心にもかけざると。恨み顔にも兄弟ハ。泣く泣く立って出でければ 母 母ハ聲をあげ。あれ止め給へ人びとよ

地 不興なれども勘當なれども許すぞ許すぞ

時致とて泣く泣く出させ給へば

十郎五郎 兄弟は嬉し泣きに伏しまろべば

地 見る人も思ひやりて泣き居たりや

母 祐成申すによつて。時致が勘當許して

みてあるぞ。近う来りて狩場への門出

いで祝ひて御盃 十郎 いざ時致

迯う来りて。この年月の御物語申
ゆくさるまでも　此ほど時致がつく
そ心よひきかへて。今はいつしか思ひ
ずの母の情ありがたや。あまりの嬉
しさよ結成お酌よ立ちてそうく
時致そもよ祝言の　謡よ聲
高き名を。雲居よあげて富士の

●獨吟仕舞

男舞（三之）

嶺の　地　雪を廻らす。舞のかざし
上　舞のかざしの其ひまよ。舞のかざ
しの其ひまよ。兄弟目をひきこれや
かぎりの親子の契と思へば涙も
つきせぬ名残かな。かの狩場より遅
参やあらんて暇申して帰る山の。
富士野の狩の。ともどうちをとらえて年来

の敵。本望を遂げんと。互におもふ。瞋恚の焰。胸の煙を富士颪に。晴らして月を。清見が關に。遂に其名をとめおきし兄弟親孝行の。ためにはあらん。嬉しさよ。

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
觀世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる曲	始めたる年月日	終へたる年月日	稽古感想
	大正　年　月　日	大正　年　月　日	

使用家の特權

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられたる所へ、送料を添へて發行所へ送附せられれば、投り所は無料にて五番綴の美本に仕立直し返送可申上候。依って使用家に期せずに一揃の五番綴謡本を得らるゝ[illegible]

版權所有

大正元年六月廿九日印刷
大正元年七月四日發行

發行者　東京市神田區今川小路三丁目九番地　王居謙太郎
印刷者　東京市神田區佐久間町一丁目二番地　七條性
印刷所　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條式金屬版印刷所

發行所　東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

竹生島

觀世流改訂謡本

内 六

竹生島

解題 官人竹生嶋に詣でゝ奇特を拜する事を作れり。明和の二百十番謠目錄に金春禪竹の作と記せども古記に據るところ無し。

能之小書 翁附の脇能に演せらるゝ時はシテの出に「釣の營みいつまでか隙も波間に明け暮けん」(白髭)の入れ句ありてサシに續く。總じて常よりも位重し。

脇能としては輕き方なり。重くなるは却て宜しからず前段の初を序に、半より破に、後段を急に謠ふべし。

謠ひ方梗概

シテ 前は常の漁翁と略同じ位にて、靜に少しく抑へて謠ふ。**サシ**は稍さらりと朗かなるべし、**一聲**にて位を少し大らかに取り、寛りと節廻しを長閑に扱ひ、次の**サシ**より再びさらりとなる。**下歌**は調子を更へて聊かゆるめに謠ひ、**上歌**は程好き運びにて、晴れ〴〵と謠ひ行く。**ワキとの問答**は老人なれば靜に落着きてあるべきも、さまで位取るに及ばず。「船が着いて候」以下の詞は、神前に參る處なれば前の詞とは心持を更へ、殊勝にして稍確りとあるが如し。後は「本より衆生」云々の一節地よりもゆるめに位を取りて健やかに謠ふ。

ツレ 前段一人にて謠ふ處はシテよりも高く輕めにとり、同吟の處は凡てシテに從ひて謠ふ。後は脇能の天女なればさらりと謠ふ中にも確りと大きなる處あるべし。

ワキ 素謠にては一人。力有りてさらりと淀み無く謠ふを旨とす。

地 「名こそさゝ波や」云々は出の高くならぬやうに注意して稍靜に謠ひ、「處は海の上」よりさらりとなり、展望の心を謠ひ表して春光洋々たる概あるべし。「魚木に上る」云々の地はシテの氣を承けて健かに且つ朗かに謠ふ。「辯才天は女體にて」云々はさらりとあるべく、**クセ**にて前よりも少しく緩めて出、漸次運びをつけて謠ひ行くなれども、クセ止メは中入なれば粗末に流れぬやう心すべし。**後**は龍神物なれば總じてこせ〳〵するを嫌ひ、大きく健やかに淀み無く扱ふを旨とす。此心得にて「御殿頻に」以下さらりと謠ひ、「其時虛空に」云々は餘り早めず、「夜遊の舞樂も」より少しく位を進め、以下**キリ**へかけて好く乘つて謠ふべし。

【辭解】**竹に生るゝ鶯** 竹生島の名に因みていふ。萬葉集に「竹の林に鶯鳴くも」、八雲御抄に「鶯の巣はなべては竹なり」など見えたれば鶯といひかけたり。**竹生島** 近江の國琵琶湖内にあり。島内に竹生島神社、竹生島辨天堂あり。島名の由來には諸說あれど何れも確ならず。**延喜** 醍醐天皇の年號天下太平の意にて聖代といふ。**明神** 竹生島神社の祭神。淺井姫命を祀ると傳ふ。辯才天を本地に立つるは中世以降の事なり。**四の宮や**云々 四の宮は山城國宇治郡山科村の一部落。鴨長明の道記に「延喜第四宮(重明親王)、此所にまします故に、此關のあたりを四宮河原といふなり」。伊勢物語に「山階のせんしのみこ(仁明天皇第四子)その山科の宮に瀧落し水はしらせなどしておもしろく作らせたる」又山州名跡志に「山科郷内に一、二、三、四の宮あり。當社(諸羽神社)其第四なる故に號ㇾ之」と見ゆ。延喜第四宮の宮址なりといふ說當れるが如し。昔は櫃川南に流れゐたるより「河原の宮居」といへども其河原今はなし。此所には河原の語を承けて末の水流早きを末早きといへり。**名も走井** 枕草子に「逢坂は胸のみ常に走り井の見附くる人やあらむと思へば」、後拾遺集に石山よりかへり侍りける道にはしり井にて清水を詠み侍りける」と詞書して「逢坂の關とはきけど走井の」云々とあり、走井は吹上井の意にて之を固有の名とする事いはれなし。名も走りと續けたるは有名なるとの意。**曇らぬ** 水に映れる月の曇らぬを御代の明かなる意に掛く。**逢坂の關の宮居** 聖代に「逢ふ」と掛く。逢坂は近江國滋賀郡に在り。關の創置は審ならざれども、延曆十四年之を廢せしこと日本紀に見ゆ。「關の宮居」は鴨長明の無名抄に「會坂の關の明神と申すは、昔の蟬丸なり」とあるをいへるなるべし。**山越** 京都北白川より登りて如意の峯越しに志賀へ出づる道。**鳰の浦** 琵琶湖畔。**便船** 船に便乘する事。**彌生** 三月の異名。**うらゝ** うららか。**うきわざ** 物憂き世渡り。船の緣にて浮きの音を借る。**うろくづ** 魚。**數をつくして**云々 魚をとれるだけとりて我が身一人の生計の料にせんとの意。「數」「ひとつ」共に緣語。**侘び人** 世の中を侘びつゝ渡る人。**ひまも浪間** 暇無きを浪間にいひかく。**同じわざながら**云々 同じく漁業を營むにしても琵琶湖は他に優れて良しとの意。**浦山かけて** 浦から山へと。**志賀の都** 天智、弘文兩帝の都。今の唐崎より粟津までの地。**花園** 天智帝の時に

造られし遊覧地といふ。**昔ながらの山櫻** 千載集に「さゞ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻かな」とあるに由る。「昔ながら」は昔の儘との意に長等山を掛く。此山は三井寺の西方に聳ゆ。**眞野の入江**云々 新續古今集に「舟よばふ眞野の浦波はるばると」云々とあり。入江は古へ眞野村の地に在りしも今は埋れて田地となれり。「よばひ」は舟を呼びの延音。**さしよせ** 棹さし寄する意。**誓の舟** 佛が衆生を救ひて彼岸に渡す誓願を舟に譬へたる語。**神慮も**云々 神の思はくも如何計り難しとなり。**迎への舟** 佛が淨土に導かんとて衆生を迎ふる舟に見たてゝいふ。**法の力** 「乘り」に掛けて、法力の功德なる旨を述ぶ。**名こそさゝなみや** さゝ浪といへども名のみにて風なければ浪も立たずとの意。さゝ浪は古事記に「追追敗出二沙々那美一」ともありて古くは湖邊の地名なりしを、後に滋賀の枕詞に轉用したる語。**國は近江の**云々 國の名も江に近きといふを湖江近く聳ゆる山々に言ひ續く **降るか**云々 今降れる雪かそれとも冬より殘れる雪かといひて下句へ續く。**時知らぬ**云々 伊勢物語に「時知らぬ山は富士のねいつとてかかのこまだらに雪のふるらむ」とあるを引く。常に雪のふりつみゐて時節に關係なき富士山を都の富士の稱ある比叡山に引きあてゝいふ。**さえかへる** 再び寒くなり返る事。春なれど比叡の雪を見て斯く思ひつゞけたる心。**比良のね** 近江滋賀郡に在りて國中最高き山なり。**雲居のよそに**云々 千載集に「知らざりき雲井のよそに見し月の影を袂に宿すべしとは」などあり。雲井のよそとは懸け離れたるをいふ。こゝには旅の習なれば鄙人も都の人も同船して知り合になるの意。**なれ衣** 着馴れたる衣。親しくなる意に掛く。**浦を隔てゝ** 衣の縁にて裏の音を借りて浦といふ。浦より隔りてなり。**綠樹影沈んで**云々 僧海國の櫻陰腐談に「綠樹影沈魚上レ木、月浮二海上一兎奔レ流その幽邃みるべし。此詩は尤唯幽の韻にて、弘法の作なり。奔流を奔浪に作るは誤也」とあり、又一說に建長寺の僧自休の作にて第二句「淸波月落兎奔レ浪」といふ。月中に兎住むと傳ふるより作れるなり。**辯才天** 別に辨財天ありて彼此相混ぜらるれど、此島に祭るは、謠曲作者の參考となりしと思はるゝ源平盛衰記に「天女と申すは卽大辯才功德天女是なり(中略)能美妙の音樂を調ぶ。左の掌を舒ては三昧の琵琶を懷き、右の手を動しては四絃の呂律を調ぶ。故に此天女をば美音天女とも名づけ、妙音樂天とも申なり」

（又平家物語にも出づ）とあるに觀ても辨財天に非ざるを知る。金光明經大辯天品に依れば、辯才天は女神にして文藝的能力を其特長とし、妙辯才を求むるものゝ爲に呪を説く。辨財天といふは吉祥天女の事にして、所謂七福神の一なり。これとは別なり。

女人禁制　修道の障りとなるが爲靈地に女人の入るを禁ずること。

久成如來　もと九生如來とあれど九生の語なし。謠曲拾葉抄に引きたる竹生縁起の詞の中には「九上如來」の語あれど此引文は該縁起に無し。惟ふに久成なるべし。觀世流寶生流にては「キウショオニョライ」といへど下懸諸流にては「クジョオヨ ニライ」と謠へり。後者の方當れり。久成は久遠實成の略にして、久遠刧以前に實に成佛せる事を表はす語、卽ち、釋迦の伽耶近成に對する五百塵點刧已前の成佛の如き、彌陀の十刧成道に對する久遠の古佛の如し。源平盛衰記、平家物語共に「往古の如來、法身の大士なり」とあり、之を言ひ換へたるものと覺ゆ。如來とは佛の事なり。竹生島縁起に本地は彌陀とあり。久遠彌陀などの語もあればそれ等に依り、彌陀の四十八願中の一なる女人も往生すべしとの誓ひを含みて「殊に女人こそ參るべけれ」とはいひたるなるべし。

それまでも云々　如來までには及ばず。辯才天が既に女人なるよとの意。

あらた　靈驗ある事。

天女と現じ　源平盛衰記に「紫磨の姿を隱して和光の道に出で給、假に端嚴の女身を莊て」とあり。又竹生島縁起に辯才天女示現等の語もあればいへるなるべし。

悲願　衆生を救はんとする大慈悲心に基く誓願。茲にては「かゝる」とあるゆゑ女人を往生せしむる願を指す。

正覺　佛の悟り

しゝつうわう　此語無し。惟ふに假名の誤傳なるべし。

利生　衆生を利益する事。

荒磯島　かほどまでに疑ひもあらじといふを荒磯島に言ひ掛く。

立ち歸り　波の立つを翁の立ち歸るにかく。

日月光り云々　日光月光並びに山の端を出づる如く燦然として輝ける光景をいふ。

かへす〴〵も　袂を返すに掛く。

夜遊　夜の歌舞

龍神　海中に在りて雨水を司る神。人間界に住めるにより「下界の」といふ。

まれ人　客。ワキを指す。

本より云々　佛は本より衆生を濟度するを其誓願とすればいふ。

さま〴〵　濟度の方便が多種なる意。

有緣の衆生　緣ある人例へば佛を信ずる者の如し。

天地に云々　龍神が奇特を示せるかたちなり

龍宮　龍王の住む宮殿。

装束附

前シテ（漁翁）

面笑尉又は朝倉尉、尉髪、襟淺黄、着附小格子厚板、茶絓水衣、緞子腰帯、尉扇、棹。

後シテ（龍神）

面黒髭、赤頭、輪冠、龍戴、赤地金緞鉢巻、襟紺、着附厚板、半切、法被、縫紋腰帯、打杖。

火焔玉（盤に載せて持つ）

前ツレ（女）

面連面、鬘、鬘帯、襟赤、着附摺箔、色入唐織着流、扇。

後ツレ（辯才天女）

面連面、黒垂、天冠、着附摺箔、白大口又は緋大口、長絹又は舞衣、縫入腰帯、天女扇。

ワキ（大臣）

大臣烏帽子、赤上頭掛、着附厚板、白大口、袷狩衣、紋付腰帯、扇。

ワキツレ（從者二人）

大臣烏帽子、萠黄上頭掛、着附厚板、白大口、赤袷狩衣、紋付腰帯、扇。

脇能

竹生島

三月

ツレ　辯才天（前ハ女）
シテ　龍神（前ハ漁翁）
ワキ　官人

ワキ次第上（健ニ淀ミナク）（三人）ツヨク（拍子合）竹に生まるゝ鶯の。竹に生まるゝ鶯の竹生島詣急がん

ワキ詞（確リ）抑これは延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり。偖も（氣ヲカヘテ）江州竹生島の明神は。靈神にて御座候間。此度君に御暇を申し。唯今竹生島に參詣仕り（大キク）

道行上（朗カニ運ビヨク）（三人）（拍子合）（打切ヤ）四の宮や。河原の宮居末

はやき。河原の宮居末はやき。名も走井
の水の月。曇らぬ代に逢坂の関の
宮居を伏し拝み。山越近き志賀の里。
鳰の浦にも著きにけり鳰の浦にも
つきにけり　急ぎ候程に。鳰の浦に
著きて候。あれなる見れバ釣舟の来り候。
暫らく相待ち。便船を乞はばやと存候

シテサシ上（朗カニ淀ミナク）

一声（コイ合）（拍子不合）

おもしろや頃は弥生の半なれば。浪もうららに海の面

ツレ（サラリ）霞み渡れる朝ぼらけ

シテセイ上（長閑ニ寛リ）長閑に通ふ舟の道。うき業となき心かな

シテサシ上（健ニサラリ）これは此浦里に住み馴れて。明暮運ぶ鱗くづの。数をつくして身ひとつを。助けやせんと侘人の。ひまも浪間に明け暮れて。世を

竹生島

渡ることぞ。もの憂けれ

下歌 よしや同じわざながら世にこえたる此海の

●小謠

上歌 ●名所多き數々よ。名所多き數々よ。浦山かけて眺むれば。志賀の都花園昔ながらの山櫻。眞野の入江の舟呼ばひ。いざさしよせてこととはん。いざさしよせてこととはん。

ワキ詞 いかにこれなる舟に

便船申さうのう　シテ(落著テ)「これハ渡舟にても
なし。御覧候へ釣舟にて候よ　ワキ(健ニ)「こなたも
釣舟と見て候へばこそ便船とハ申せ。これ
ハ竹生島に始めて参詣の者なり。(拍子不合)カル上(淀ミナク)誓の
舟に乗るべきなり　シテ詞(急カズ確リ)「げに此處ハ靈地
にて。歩を運び給ふ人をこそ申さバ
御心にも違ひ。又ハ神慮も計りがたし

ツレカヽル上（サラリ）さらばお舟を參らせん　早（健ニ）嬉しやさては

迎の舟。法の力と覺えたり　シテ行（氣ヲ起シテ）けふは

殊更長閑にて。心にかゝる風もなし

地下歌　中（靜ニスラリ）カヘテ　名こそさゞなみや志賀の浦にお立ち

（拍子合）あるは都人か。痛はしやお舟に召されて

浦々を眺め給へや　上歌（長閑ニ滞リナク）所は海の上。所は

海の上。國は近江の江に近き。山々の春

●獨吟

あれや花ながら白雪の。降るか残
るか時知らぬ。山は都の富士なれや。猶
さえかへる春の日に。比良の嶺おろし
中（前ヨリ運ビテ）吹くとても。沖漕ぐ舟はよも盡きじ。打切
旅のならひの思はずも。雲居のよそに
見し人も。おなじ舟になれ衣浦を隔
てゝ行く程に。竹生島も見えたりや

シテ上（健ニ引立テ）緑樹影沈んで　地（朗カニ運ビテ）魚木に登る氣色あり月海上に浮かんでは兎も浪を奔るか面白の島のけしきや。（シヅナル）

シテ（静ニ）船が著いて候おあがり候へ　ワキ（健ニ）あら嬉しや頃て神前へ參り候べし　シテ（健ニ）此尉が御道しるべ申し候ふべし。（氣ヲカヘテ殊勝ニ）これこそ辯才天よ候へよくよく御祈念候へ　ワキ（素直ニ）承り及び

たるよりもいや勝(マサ)りてありがたけれ。（氣ヲカヘテ）不思

議やな此島ハ。女人(ニヨニン)禁制(キンゼイ)とこそ承りて

はべれ。あるに女人ハ何(ナ)とて来られて候ぞ

シテ（殊勝ニ確リ）それハ知らぬ人の申し事(ゴト)にて候。忝(カタジケナ)くも

此島ハ。久成如来(キウジヨオニヨライ)の御再誕(ゴサイタン)なれバ。殊に

女人こそ参るべけれ　ツレカヽル上（淀ミナクスラリ）（柏子不合）のうそれまでも

地上（健ニ運ビヨク）

なきものを（柏子合）辨才天ハ女體(ニヨタイ)にて。弁切　辨

才天は女體にて其神徳もあらたなる。天女と現じおはしませば。女人とて隔なき御ちかひ唯知らぬ人の言葉なりかゝる悲願を起して。正覺年ひさしきつうわうの古へより利生更に怠らず

シテ上（朗カニ引立テ）げにかほど疑も

地（前ヨリ運ビテ）荒礒島の松蔭を便りによするあまの小舟。われ人の

御はあらずとて。社壇の扉を押し、
開き、御殿に入らせ給ひければ。翁も
水中に入るかと見えしが、白波の立ち帰り
我は此うみの。あるじぞと言ひ捨てゝ
また波に入らせ給ひけり　来序中入

ツヨク
出端（謡掛）（拍子不合）
上（雄大ニスラリ）（ヤ）
御殿頻に鳴動して。日月光り輝きて。
山の端出づるごとくにて現れ給ふぞかた

じけなき

後ツレ上（確リ運ビヨク）抑これは。此島にすんで。神を敬ひ國を守る。辯才天とは我が事

なり（拍子合ノル）打上（ヤア）地上（朗カニ引立テ）其時虚空に音樂聞え。其時

虚空に音樂聞え。花ふりくだる。打込打返（ヤア）春の

夜の。月に輝く少女の袂。かへすがへすも。

（ユルメル）（拍子外ス）おもしろや　天女舞（拍子合）打上打返（ヤア）上（前ヨリ運ビテ）夜遊の舞樂も時過

打込打返（ヤア）ぎて。夜遊の舞樂も時過ぎて。月すみ

地拍子
龍神現（中）トモ

●獨吟

渡る。湖づらに。浪風頻に鳴動して。（位ヲ進メテ）

下界の龍神現れたり（拍子外ス）

上（健ニ淀ミナク）早笛（拍子合）打上打返（中）●龍神湖上に

出現して。（打込打返（中））龍神湖上に出現して。光も

輝く金銀珠玉を彼のまれ人に。捧ぐる（拍子外ス）

けしきありがたかりける。奇特かな

仕舞 働（拍子合）打上打返（中）

シテ 中（健ニ寛ソリ）●本より衆生済度の誓。地 中（健ニ運ビヨク）本より衆生

済度の誓さまぐなれば。或は天女の

かたちを現し。有縁の衆生の所願を
かなへ。又ハ下界の龍神となつて。國土を
鎮め。誓をあらわし。天女ハ宮中にいらせ
給へバ。龍神ハすなわち湖水に飛行して。
波をけたて。水をかへして天地にむらがる
る大蛇のかたち。天地にむらがる大蛇の
かたちハ。龍宮にとんでぞ。入りにける。

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
觀世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

使用家の特權

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられ候節、返送料を添へて發行所へ送附せらるれば、裝り所は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正十四年五月一日印刷
大正十四年五月五日發行

（大正版 一番綴）

發行者　東京市神田區今川小路三丁目九番地　土居源太郎
印刷者　東京市神田區東松下町十二番地　鈴木彌作
印刷所　東京市神田區東松下町十二番地　信英堂印刷所

發行所　東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話九段二三〇五、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

大原御幸

觀世流改訂謡本

内 七

九番習
三番目

大原御幸（オハラゴコオ）

四月

ツレ　後白河法皇
ツレ　阿波内侍
ツレ　大納言局
シテ　建禮門院
ワキ　萬里小路中納言
ワキヅレ　官人
ワキヅレ　供奉人

官人「これハ後白河（ゴシラカワ）の院に仕へ奉る臣下なり。さても此度先帝（センテイ）二位殿（ドノ）を始め奉り。平家（ケ）の一門長門の國早鞆（ハヤトモ）の沖にして。悉く果て給ひて候。女院（ニョオイン）も御身を投げさせ給ひしを取り上げ奉り。かひ（イ）なき御命助かりおはしまし（ワ）候。三河の守

範頼九郎大夫の判官義經兄弟供奉し申し。三種の神寶事故なく都に納まり給ひぬ。さる程に女院は都に移らせ給ふべかりしを。先帝安徳天皇の御菩提。並に二位殿の御跡御弔ひの爲に。大原の寂光院に浮世を厭ひ御座ぬを。法皇御幸をなされ。御訪ひ

あるべきとの教訓にて候間。御幸の
山路(ヤマヂ)をも申しつけばやと存じ候」いかに
誰かある。大原(オオハラ)へ御幸あるべきなれば。
行幸(ギョオゴオ)の道をもつくり其清めを仕候へ
女院サシ上 ヨワク
「山里は物の寂(ザミ)しきことこそあれ。世の
クドキ
憂きよりはなか／＼に。女院 内侍三人 局 住みよかり
ける柴の樞(トボソ)。都の方の音信(オトヅレ)は間遠(マドオ)に

▲地ニテモ

●小謡

結へるませ垣やらきふし繁き竹柱。立居まつけて。物思へぞ人目なきこそ安かりけれ　下歌　ちやうくよ心なけれど訪ふものとて　上歌　賤が爪木の斧の音。賤が爪木の斧の音。梢の嵐猿の聲。これらの音ならでは。まさきのかづら青葛くる人稀まなりはてゝ。草。

拍子割 草顔淵

いかに大納言の局

顔淵が巷に。深き思の行くへとて。雨原憲が樞とも湿に袖の涙かな湿に袖の涙かな。

女院詞「いかに大納言の局。後の山に上り樒を摘み候べし

局「わらびも御供申し。爪木蕨を折り供御に供へ申し候べし

女院サシ上「譬は便なき事なれども。悉達太子は浄飯王の都を出で。

檀特山のさかしき道を凌ぎ。菓摘み水汲み薪とり〴〵様〻に難行し仙人に仕へさせ給ひて。終に成道なるとかや。われも佛の為なれば。御花筐をとり〴〵猶山深く入り給ふ猶山深く入り給ふ

中入

中納言 供奉一セイ上ツヨク

九重の。花の名殘を尋ねてや。青葉を

次第上

慕ふ山路かな　分けゆく露もしげ

み草。分けゆく露もしげみ草。大原の

み幸急がん

中納言詞

行幸を早め申候間。

大原に入御候。かくて大原にみ幸

なつて。寂光院の有様を見渡せば。露

結ぶ庭の夏草繁りあひて。青柳糸

を乱しつゝ。池の浮草波に揺られて。

錦をさらすかと疑はる。岸の山吹咲き
乱れ。八重立つ雲の絶間より。山郭公
の一聲も。君の御幸を。待ち顔なり
法皇　法皇池の汀を叡覧あつて。池水に。
汀の櫻散り敷きて。波の花こそ盛な
りけれ　地上歌　ふりにける。岩のひまより
落ちくる。岩のひまより落ちくる。水の

トリ一地の記入の位置を改訂して正しきに就く、拍子當りは舊本共に同じ。

音さへ由ありて。緑蘿の垣翠黛の山。繪にかくとも筆にも及びがたし。一宇の御堂あり。甍破れては霧不断の香を焼き。樞落ちては月も又常住の燈火をかゝぐる。かゝる所の物までどやかゝる所の物までや

中納言局「これなるこそ女院の御庵室にてありげなり。軒には

蔦朝顔這ひかゝり。藜藿深く閉せり。あら物すごの氣色やな。いかに此庵室のうちへ案内申候

内侍「誰にてわたり候ぞ

中納言「これは萬里小路の中納言にて候

内侍「それはさて人目稀なる山中へは。何とて御渡り候ぞ

中納言「さん候女院の御住まひ御訪ひのため。法皇

これまで御幸なりて候　内侍「女院は上(ウエ)の山へ
花摘みに御出でありて。今は御留(ル)守(ス)に
て候」　中納言「御(ゴ)幸(コオ)の由申してたべ。女院は(ナ)
上の山へ花摘みに御出でありて。今は
御留守の由候。暫らく此(コノ)処(トコロ)に御座を
なされ。御帰りを御待ちあらうずる
にて候　法皇「やあいかにあの尼(アマ)前(ゼ)。汝はいづ

なる者ぞ　内侍「げに〳〵御見忘れは御理。これは信西が女。阿波の内侍なれる果にて候。かくあさましき姿ながら。あぞちも去らぬ此身なれど。恨とは更に思はぎてさむらふ　法皇問「女院はいづくに御渡り候ぞ　内侍「この山へ花摘みに御出でにて候　法皇「さて御供には　内侍「大納

どれハ信西が女　トモ

花つみに　トモ

言の局。今までこし待たせおはします

ゆへ。やがて御帰りまでゆべし

（女院サシ上）昨日も過ぎけふも空しく暮れなん

（アシラヒ出）とても。あすをも知らぬ此身ながら。唯

先帝の御面影。忘るゝ隙はよもあ

らじ。極重悪人無他方便。唯称弥陀

得生極楽。主上を始め奉り。二位殿

一門の人々成等正覺。南無阿弥陀佛。

や。庵室のあたりよく音の聞えは

局「暫くこれは御休み候へ　内侍「唯今こそ

あの岨づたひを女院の御帰りまでは

法皇「さて何れが女院。大納言の局いづれぞ

内侍「花筐肘にかけさせ給ふは。女院にて

わたらせ給ふ。爪木に蕨折り添へたるは

大納言の局なり」いかに法皇の
御幸までは 女院「かくて猶妄執の
閻浮の世を。忘れもやらで憂名を又
もらせじともるゝ涙の色。袖の氣色も
つゝましや 地下歌「たゞ思へども法の人
同じ道よと頼むなり 上歌「一念の窓の前。
一念の窓の前よ。攝取の。光明を期し

つゝ十念の柴の樞には。聖衆の來迎を
待ちつるに。思はざりけるけふの暮。
古へに帰るかと猶思出の涙かな。げにや
君こゝに叡慮の恵みかけてあはれ
もさぞな大原や。芹生の里の細道朧の
清水月ならで。御影や今に殘るらん

ロンギ上 さてや御幸のをりしもは。いかなる時節

あるらん［女陰上］春過ぎ夏もはや。北祭の
をりあれば。青葉まじる夏木立
春の名残ぞ惜まるゝ［地上］遠山にかゝる
白雲は［女陰］散りにし花の形見かや
［地上］夏草の茂みが原のそことなく分け
のり給ふ道の末［女陰］こゝぞとやここ
ぞやげに寂光の寂なる。光の影を

惜めたゞ光の影も明けき。玉松が枝よ咲きそふや池の藤は夏かけてこれも御幸を待ち顔よ青葉隠れの遅櫻初花よりもめづらかよ。あはれ様変る有様を哀と。叡慮よかけまくも。かたじけなしや此御幸此柴の樞の惠ぞ。しらるゝ程もあるべき

住まひあるべしや。あるべき住まひある
べし。女院「思ひきや深山の奥に住まひ
して。雲居の月をよそに見んとは。
かやうに思ひ出でしよ。此山里までの
行幸。かへすがへすもありがたうこそ候へ
法皇詞「先つ頃ある人の申せしハ。女院ハ六道
の有様正に御覧じけるとかや。仏

獨吟

菩薩の位ならでハ見給ふ事なきに

不審にことにて候へ　教説ある御事な

れども。つらつら我が身を案じみるに

それ身を観ずれバ岸の額に根を。

離れたる草　命を論ずれバ江の

ほとりにつながざる舟　されバ

天上の楽みも。身に白露の玉葛

地 ながらへ果てぬ年月も。終に五衰の
おとろへの
女院 消えもやられぬ。いのち
のうちに
地 六道の巷に。迷ひしなり
クセ まづ一門西海の浪に浮き沈み。よるべも
知られぬ船のうち。海に臨めども。潮な
れば飲水せず。餓鬼道のごとくなり。又
ある時は。汀の浪の荒磯に。うちあへまで

ちの心ちして船擧りつゝ泣き叫ぶ。聲は叫喚の罪人もかくやあさましや陸の争ひある時はこれぞ眞に目の前の修羅道の戦ひあら恐ろしや數多の駒の蹄の音聞けば畜生道の有様を見聞くも同じ人道の苦みをなり果つる憂き身のはてぞ悲しき。

法皇詞
「真にありがたき事どもかな。先帝の
御最期の有様何とかわたり候ひつる
御物語り候へ」女院「恥かしながら語つて
聞かせ申し候べし。其時の有様申さば
つけて恨めしや。長門の國早鞆とや
らんまで。筑紫へひとまづ落ち行く
べきと一門申しあひしよ。緒方の三郎が

心變りせし程に。薩摩潟へや落さんと申しけるが。汐にさへられ。今はかうよと見えしに。能登の守。教經は。安藝の太郎兄弟を左右の脇に挾み。最期の供せよとて海中に飛んで入る。新中納言知盛は。沖なる舟の碇を引き上げ。兜をやらんに戴きめのとごの

家長が弓と弓とを取りかはし。其まゝ
海へ入りけり。其時二位殿にぶ色の
二つぎぬよ。練袴のそば高くはさんで。
我が身は女人なりとても。敵の手には
渡るまじ。主上の御供申さんと。安徳
天皇の御手をとり船ばたに臨む。
いづくへ行くぞとて。勅諚ありしよ。此國と

申すに逆臣多く。かくあさましき處
なり。極樂世界と申してめでたき處の
此浪の下にさむらふあれバ。み幸あり
奉らんと。泣く泣く奏し給へば。さてハ
心得たりとて。東に向はせ給ひて。天照
太神に御暇申させ給ひて——地 前ヲ受ケテ ヲカヽヘ 中 又十念
の御為に西に向はせおはしまし

女院上 今ぞ知る 地 御裳裾川の流れには。浪の底にも都ありとは。これぞ最期の御製にて。千尋の底に入り給ひし。みづからも。續いて沈みしを。源氏の武士。とり上げて。かひなき命ながらへ。二度。龍顔にあひ奉り。不覚の涙に袖をしほるぞ恥かしき。いつまでも御名残れ

いとゞ盡きぬべき。はや還幸でまし
ませば。はや還幸でましませば。お輿を
早めはるぐと。寂光院を出で給へバ
女院ハ柴の戸よ　遠ざかる程ハ見
送らせたまひて御庵室へ入り給ふ
御庵室へ入り給ふ

文學博士 井上頼圀本文監修
丸岡桂本文訂正
観世清之節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

大正七年三月二十日印刷
大正七年三月三十日發行

著作權所有

大正版 一番綴

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金屬版印刷所

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
観世流改訂本刊行會